
春夏秋冬-君と歩いた道-

高科 三國

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春夏秋冬・君と歩いた道

【Nコード】

N6941V

【作者名】

高科 三國

【あらすじ】

「あらすじ説明だあ！？なんでんなこと俺がやらなきゃならねえんだよ！だいた…」
バキヤツツツ！！

「いいから説明しなさい？ふ・し・か・わ・あ・お・い君？」

「（腹を抑えながら）イ、イエッサー…秋山委員長…」

「じゃあして頂戴。」

「…とりあえず俺、高校2年の節川葵のふつーの物語だ。具体的に…どんな話だっけ、春風？」

「……………」
「（汗）どんな話だっけ、リン」
「やったよー葵ーっ！……！終にCGコンプだよあ〜っ！……！」
「……まあ興味が出たら読んでくれ……」

1・始まりの季節

……

……

……

「起きろーっ！ー！！」

「ぬはぁうっっ！ー！！」

全くみつともない声を上げてベッドにうずくまる。

時計はちょうど7:00をさしている。うちでの朝食はジャスト7:00からでそれに遅れると…今の様になる。

「ぐっ……腹が痛いん……だが……」

「兄ちゃんが悪いんだろ？毎日起きてこないんだからよぉ」

こいつは俺の弟の三葉^{みつば}である。とりあえずやんちゃな奴だな。

ちなみに今の状況を説明すると、起き際に弟がヒップドロップをかまして

きた次第だ。まあいつものことではあるので、慣れつつはあるが。

「んじゃ、早く降りてこいよ。」

「ああ、わーった。」

俺は生返事でそう返して着替えはじめる。

テーブルにはもう皆そろっており、各々の食事を摂っていた。

「おはようございます、父さん、母さん。」

「おはよう。たまには自分で起きなさいよ？」

母は食器を洗いながらこたえる。

父は首を縦に振ったのみだった。

「春風^{はるか}もおはよう。」

「……………」

妹からは最早無反応であった。こいつは中3で受験生真っ盛りだ。特徴としては…とにかく無口で家族とすら口を交わすのは珍しい。

こいつ、学校じゃどうしてんだらうな？

「人の心配してて良いの？」

「……………」
妹を真似て無口になる俺。

そう、今は丁度中間試験が終わった6月の頭。俺の成績は毎年すこぶる悪く、今通ってる高校も入っているのが奇跡みたいなもんだ。今日起きれなかったのも夜までゲームをしていたことが原因だったりする。

空気が気まずくなった俺はそそさくと食事を済ませ学校へと出発する。

「まあ！！満点4つも取ったの！？すごいわねー！！」
扉の向こうからは春風を誉める母の声が聞こえていた。

「おっはよーっ！！」

朝からのいざこざでげんなり気味の俺が出会ったのは隣に住んでいる夏目葵だ。俺とは幼なじみってことになるのかな？？

幼稚園の頃からずっと一緒にいていつもこうして一緒に学校へ行っている。

ちなみに…容姿だけ見ればトップクラスでかわいい。

「よう。朝からテンション高えな。何か良いことでもあったか？」

「ふっふっふ…よくぞ聞いてくれました葵くん。何と…終に落としたのですよー！！」

「なっ！！まさかあの難攻不落のドラキュラ城を…」

「カナちゃんがやっとオチてくれたんだよおーっ！！」

……………そう、夏目葵は容姿端麗で勉強に関して文句がないが……………

その…なんだ…いわゆる

『オタク』ってやつなんだよな。今いつてたのも、まあギャルゲー

かなんかだろう。

あ、俺が想像してたのは昨夜のRPGな。

「…そうか……………」

遠い目をして答える。

「んもーかわゆいんだもん！！ツンデレ幼なじみのカナちゃん！！」

「ふーん…んなもんかあ？」

「…やったげよっか??？」

「何故そうなる!!!??」

展開が急過ぎて訳がわか…

「べ、別にあんたの為にギャルゲーやってんじやないんだからね！」

「急過ぎるわ!!!てかさうだったら俺女子にギャルゲー薦める変人ですし!!!」

「べ、別にあんたが変人なんて思っていないんだからね！」

「その解釈はあつてますよ!?変人じゃないっすよ!??」

「べ、別にあんたが変人だってm i iでつぶやいたりしてないんだからね！」

「なあお前ホントにしてねえよなあ!!!??」

やべえ、なんか知らんがいきなり泣きそうだ…

すると夏目は振り返り際に

「するワケ…ないじゃん。だって私…葵のこと…好きなんだし……………」

……………は?????

今なんと!!!??

確かに今すすす好きっっつて言っ t

「…どう?私のツンデレ???」

「帰れえええええ！！！！！！」

「え？え？どうしたの……？？」

「もう何でもねえよーっ！！！！！！思春期男子の心を弄びやがって
っ！！！！」

「いいさっ！俺は……俺は……」

そんなこなしている間に俺らは学校の前に着いていた。

「いてて……」

脇腹をさすりながら校門を出る。

学校はいたって普通だった。テスト返して一喜一憂したが今回の結果はまあまあだよ。これも全て委員長、秋山凛様のお陰だ。

彼女も美人で文武両道、しかもボーイッシュで男女共に人気の高い、まさに学年のマドンナだ。

そんな彼女が提案した企画に「クラス勉強会」というのがある。それにより俺の成績に赤い文字があることは今のところない！

そんな中赤点を取った赤木は秋山に喝を食らったのだ。というのも彼女は空手をやっており、そちらでの成績もまずまずらしい。

その回し蹴りを食らったのだからまあ奴が撃沈するのも無理がない。

しかし俺の問題はそこからだった。

がこーん、と蹴り良い音を奏でた時、ふわりとスカートが舞ったのだ。

まあ当然そうなるのだろうか、その時俺は誤って

「……………水いっ！！」

口が滑ってしまったのだ。

……………その後の展開は恐らくご想像通りなので、省かせてもらおう。
というか今日、俺結構はちゃめちゃしてますよね……

「いや、しかし…水色かあ……」

「…何やってんの??」

横を向くとそこには…

「あ、秋山!？」

「あたしだと悪い??あ、あとその顔はどうかと思う……」

「……………!!」

相当ヒドい顔をしていたに違いない。だって考えてたことが

「水……」

バコツツ!!

「ぐひう……………!!」

神雷の如くのエルボーを脇腹に食らった…

みなまで言っていないよ、俺!?

「どうしたの??」

満面の笑みで聞いてくる。

「いえ……………アレ、とても似合っていました。」

体は正直だった。

ドゴオオオツ!!

一瞬の内に真正面に来てからの正拳突。

「感想なんか求めてないわよっ!!」

そして、そそさくと彼女は去っていった。

…節川葵は…めのまえがまっしろになった。

1・始まりの季節（後書き）

この作品を読んでいただきありがとうございます。

今回の話は殆どが主要人物の紹介というような形でしたが、次回からは

本編に入っていく予定です。

本作品に関する感想は様々でしょうが、読んで下さった方は

感想・指摘問わず何かコメントをいただけると本当に嬉しいです。

今後ともよろしく願います。

2・晩春の夜

……

……

……

……うん？

「気がついた？」

甘いけど落ち着いた声が聞こえる。

「秋山か。」

「そう、悪かった？」

「いや、別にそんなワケじゃねえよ……っ」

腹が痛むな……これ以上墓穴を掘る訳にはいかなそうだ。

てかこいつは意外と謙虚なのか？

会うたびに悪い悪いって……

「ごめん……痛む？」

「それ程じゃねえから……心配すんな。」

秋山の表情が少し安堵に包まれる。

しかしパツと見ではやはり心配そうだ。

……こんな時でも綺麗だと思えてしまえるから凄い。

やっぱかわいいよなあ……秋山。

「……何か私の顔についてる？」

「なんでもねーよ。」

赤面せずに（多分していなかったはずだ……）冷静に対応できた俺の能力を賞賛してほしいね。

そういう会話を繰り広げた後にある疑問に気が付いた。

というか初めに気付くべき疑問だな、これ。

…ここ、何処だ??

周りは畳が広げられていて、もちろん見覚えはない。

部屋の広さは大体八畳つてとこか。

俺の表情で察したらしい秋山がその答えを言ってきた。

「ああ、ここ私の家よ。」

「ぶつつつ!!!」

布団にもの凄い勢いで突っ伏した。

はあ!?!お前の家!?!何で!?!

「いや、だって…貴方が倒れた原因は私にある訳だし…」

まあ原因っちゃあ原因だ。

だけど…だけどだ……

だからといっていきなり自分の家に運んで来る奴がいるか!?!?

自分は自分のことを『そういう過ちは犯さない人間』と決めてはいるが

名目上は『健全たる高校生男子』である。

何かの拍子でこの状況が外にもれたら厄介極まりないよな。

とりあえず帰ろう。外も西日がだいぶ強くなってきたいるしな。

「んじゃあ俺、そろそろ帰るわ。」

そう言っつて布団から出ようとしたときである。

「何言っつてるの?夕食、もうすぐ出来るわよ?」

そしてまた布団へ突っ伏する俺。

「何でそうなんだよ!!!」

「だって母さんが食べてけーって…」

「つつつてもなあ……」
いきなり女子の、しかもそこまで親しくない女子の家で食事をす
つていうのは……流石になあ……
少なくとも母はいるらしいからそういう点では安心だけど……
そんなことを悶々と考えていると、ふと襖いすまが開いて人が入ってきた。
……恐らく秋山の父親だ。秋山と同じく空手をやっているのだろうか、
かなり体つきが良い。
んでもってすげえ形相でこっち見てるんすけど……

「こ、こんにちは。」
礼儀として一応挨拶をしておく。

「こんにちは。」
堅い表情で挨拶を返してくれた。

そしてその直後、いきなり正座をしたと思ったら頭を下げてきたの
だ！

「え、ちよっ……」

状況が読み取れず混乱してしまった。

するとおじさんはいきなりこんなことを話して来た。

「まず君に謝りたい。本当にすまなかった。うちの娘が君にやって
はいけないことをしてしまった。」

なるほど、少し状況が読めてきたぞ。

つまりこうだ、秋山の例の空手が炸裂して俺が倒れてしまったこと
に対して謝罪しているんだろっな。

けどそこまですなくても……

悪いのは（多分）俺にある訳だし、ちゃんと秋山も事後処理をして
くれた。

そう考えているとおじさんが続けてきた。

「君と凜がいるところに偶然通りかかってね。凜の顔色がすごぶる悪かったから何かと思えば……」
そういつておじさんは隣を見た。

秋山は表情を暗くして俯いている。
「……」
「……」

「でもおじさん、俺もう大丈夫なんでそんなに気を使わなくても良いですよ。」

本心では結構腹が痛いかな……

これ以上秋山の暗い顔を見るのも嫌だ。

「そういう訳にもいかんのだよ、節川君。武術家がむやみに手を挙げるのは厳禁だ。」

「しかし秋山さんはそんな悪気は……」

「無論悪気があつて拳をふるつたのならこの程度では済まさん。この程度だったからこそ、君にはゆっくりして欲しいのだよ。」

そうか……秋山家の義理の深さには感服だな。

ここは甘えさせてもらうか。

「それじゃあ甘えさせてもらいます。ありがとうございます。」

おじさんは済まなそうな、満足そうな表情を浮かべた。

「じゃあ私は支度をして来るわね。」

そういつて秋山は立ち上がった。

今まで気付かなかったけど、こいつ……エプロン姿だったのか……！

白いフリルがふわっとうかぶ。

やべえ、超似合ってる……！！！！

赤面してしまっていたのだろうか、おじさんがつつこんできた。

「綺麗なもんだろ。自慢じゃないが自慢の娘だよ。ちゃんと文武を両立しているしことだしな。」

…いや、自慢してんじゃねえか。
好きなんだろうなあ、娘のことが。

この親父さんの行動も秋山の為思っていることなんだろう。

親父さんと共に部屋を出た。

そこで俺はいきなり驚くことになる。

「（ろ、廊下でけえっ！！！！）」
親父さん曰く、親父さんは空手の有名な選手らしく大きな大会で優勝しているらしい。そしておばさんは高校の先生をしていると……

「だーれがおばさんだってえ！？」

「うおっ！！！！？」

ドアを開けていきなりおば……お母様が出てきた。

「だから誰がおばさんですって？」

「！！？ いや…今の心の声なんすけど……」

「だからそれは本心なんですよ？？」

何故分かる！！！！

「高校教師やつてると分かってくるのよ。生徒達が何考えてるか。ご飯できたからいらっしやい。」

俺らは言われるがままにお母様のあとをたどる。

ドアの向こうはダイニングルームとなっていた。

白を基調とした洋風な雰囲気になっている。

それに広えな、おい。

カウンターの奥のキッチンから皿が運ばれて来た。
どうやらカレーらしいな。

「いっぱい作ったからしっかり食べなよ！」

お母様が澁刺とした声で言ってくる。

秋山はお母様似なのかもな。

……綺麗だし。

「あら、惚れちゃったあ？」「だからなんで分かんたよあんたは！
！」

思わずつつこんじまったよ！！

「もう、何やってんの、母様！節川君、たべましょ。」
そう秋山に促されて席に着く俺。

ガラス張りのテーブルの上にはカレーと木の皿に盛られたサラダ。
…なんかむっちゃ美味しそうなんですけど…

「ちなみにこれを作ったのは……？」

「基本的に私だよー？」

そうやって秋山が答える。

「父様も母様も忙しいからね。家事は私がやることが多いのよ。」

まあ二人とも仕事頑張ってますよーって感じだもんなあ。

偉いなあ、秋山は…

「さあ、立っててもなんだ。食べようじゃないか。」親父さんがそ
う仕切って俺らは食事を始めた。

…うん………やっぱこれ美味えわ！！！！

ほど好い辛さと深いコク……であってまるやかな口触り。

一日二日ではここまで美味しいものは作れないだろうな…

きつとずっとやってきたんだろう。

「美味しい??」

「ああ、とても美味しいよ。お前料理上手いな。」「それでもな
いよ……ふぶつ。」「

謙遜はしていたが、顔は嬉しそうだ。

そんな顔も……………

「…………… W W W」

お母様が不敵な笑みをこちらに向けていたのでこれ以上考えることはやめた。

2・晩春の夜（後書き）

皆様こんにちは。

どりんくばーです。

今作品を読んで頂きありがとうございました。

今回から本編に入りましたが、やはり素人丸出しの内容となつています（汗

これから面白い作品が書ける様、頑張っていきますので、また機会があればお読み下さい。

3・梅雨、曇り空の日

……

……

……

皆さんもこの始まり方にもいい加減飽き飽きしてきた頃だろう。

うん、俺も飽きたよ。

だけど、だけどな……

「……………」

「……………」

秋山家から歩き始めて約5分。

少し小雨が降ってきて6月といえど、薄着の為少し肌寒い。

そんな中それ程仲の良くない男女二人が散歩をしたらどうなるか予想は出来るだろうか。

そう、先程から俺らは無口を貫いているのだ。

だって良く考えろよ!!

秋山だぜ!？あの学園のマドンナの秋山だぜ!？

さーさすがに無理だつて……

そうやって俺が萎えている間も秋山は俯き加減で歩いていた。

そろそろ打開しなきゃいかんだろ!!？

なんつーか……………」

漢おんとしてっ……!!

「あ、あの…今日はありがとな。」
「ん？私何か良いことなんかしたかしら？？」
「いやあ、介護してもらったし、カレーも戴いたしさ。」
水色パンツも見たいしさ！

「その元凶が私にあるんだから当然でしょ！ほっとける訳…ないじゃない…」

…でもその元凶はきつと俺だよなw

「そっか…んでも嬉しかったよ。エプロン姿見れたし手料理食べたしさ。」

「あ…それなんだけどさ…」

いきなり秋山の顔が曇る。

「あれね…実は私殆ど作ってないの…！」

「…！？どうということ??？」

「いや、私実は料理が苦手で…あのカレーも実は少し野菜を切ったくらいで…」

「そうだったのか…」

あれ？なんか俺すつげえ落ち込んでない??

べ、別に秋山の完璧な手料理が食べたかったーなんて思ってないんだからね！！（夏目風）

「…節川君??？」

「あ、いや、なんでもないんだからね！！！」

「…！？だ、大丈夫??？」

「いあ、ん、大丈夫だ。」

俺は考えたことが口に出てしまう性たちなのか!?

「じ、じゃあさ、今度食べさせてよ。」

「えっ…!?!」

「秋山の完全手料理。いつか俺に振る舞ってくれよ。」

我ながら大胆な告白をしたもんだ…

学年のマドンナにそんなお願いなんて…

……考えれば考える程恥ずかしくなってきた…!!

「いいよっ。」

「ふえい!?!」

「だから、今度貴方に私の手料理を振る舞ってあげるって言ったの
!?!」

……俺はしばらく声が出なかった。

というより出せなかった。

……マジですか!?!??

「ホントに良いのか!?!」

「良いわ。秋山家の女に二言はないもの!?!」

そりゃあ大層な家柄で…

「んじゃあ、いつか頼むぜっ!?!」

俺は満面の笑みを浮かべながらそう答えた。

身体が興奮し過ぎて冷静になれねーよっ!

隣では秋山が頬を紅潮させながら、けどどこか嬉しそうな顔で俺の方を見ていた。

そういう約束を取り付けた後数分。
秋山家の最寄駅に着いた。
俺の家の最寄駅から四つ離れた駅だ。

「そんじゃ、今日は世話になったな。ありがとよ。」
「そんなんでもないよ。」

秋山は謙遜しがちに答える。

「じゃあ、帰るわ。」

そういつた時だった。

「ま、待って……!!」

少しトーンの外れた声が後ろから聞こえた。

振り返ると小走りで秋山がこっちに向かって来ている。

そして耳元で何かを囁いた。

「……だよ。ホントだよ？」

……えっ???

今何て言ってたんだ??

最後のホントだよ、しか……

「じ、じゃあねー!!」

秋山はこの場から逃げる様に立ち去っていった。
声をかける隙も……なかった……

……
俺はその場に呆然と立ち尽くした。

曇った空から降ってくる少し遅めの五月雨によって俺の服は濡っていた。

3・梅雨、曇り空の日（後書き）

いかがだったでしょうか。
今回は秋山さん中心の回
としました。

毎回同様、感想を頂けると本当に嬉しいです。

それでは、次回作も作る予定なので、良かったら目を通してみてく
ださい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6941v/>

春夏秋冬-君と歩いた道-

2011年10月9日13時45分発行